研究ノート

ジョン・ヒック自伝に見るAFFORの活動[1]
— 宗教多元主義の実践と創造 —

間瀬　啓允

はじめに

『ジョン・ヒック自伝』の第15、16章に、民族混交の英国第二都市、バーミンガムにおけるAFFOR の活動が詳細に記述されている。[2]

AFFOR は‘All Faiths for One Race’(「すべての信仰は人類全体のために」)の略である。‘one race’の‘race’は‘human race’のことで、ここには「どんな信仰も人類全体のためにあるのだから、諸信仰間の対話や宥和は絶対に欠かしてはならない」という強い主張が込められている。

AFFORはバーミンガム在住の住民有志による社会的、宗教的活動であり、その活動は1970年代から1980年代半ばまで続けられた。当時、バーミンガム大学の教授であったジョン・ヒックはこの活動に身をおいて、「宗教多元主義」[3]の理論を実践的に創造していったのである。

活動の始まり

1970年アパルトヘイト体制下の南ア連邦から白人だけのクリケットチームが訪英することになった。この受け入れはアパルトヘイト政権への暗黙の承認につながる。そこで英国各地に反対運動が起こった。バーミンガムでは、一試合が予定されていた。そこで試合開催を阻止する運動が市民の間に始まった。アパルトヘイトに関する情報を満載したジョン・プラマーのパンフレット『時は満ちた』が広く配られ、教会指導者たちにも強い働きかけが行われた。

当時、バーミンガム大学の教授であったジョン・ヒックは、この活動に参加し、教会指導者たちとの連名で、試合に反対する抗議書を作成し、関係諸機関に圧力をかけた。このとき初めて、ヒックは人種差別主義者たちから無数の、

匿名の手紙を受け取り、緊張する。その全てが、暗に脅しをかけるものだったからである。

国中に広まった抗議がもとで、南ア・チームの訪英は中止された。しかし、中止が決まった試合に対する抗議ではなく、民族混交のバーミンガムに住む市民たちが、よりよい人間関係を築くために、当初予定していたデモは決行されることになった。ヒックはこのとき、民族混交の小グループを率いて報道機関に接触し、組織の誕生を発表した。それがAFFORであった。この組織はキリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒、ヒンズー教徒、シーク教徒、マルクス主義者、ヒューマニストから成っていた。

ヒックは、デモ行進について、次のように伝えている。

> 約900人が列を作り、ブルリング・ショッピングセンターから街の中心をまわって、バーミンガム大聖堂の構内まで歩いた。横断幕には「すべての信仰は人類全体のために」「イスラームの教えは人類和合」等々と大書されていた。大聖堂の外では、短いスピーチが行われた。大聖堂の主任主教、シーク教の代表、ローマ・カトリックの信徒代表、自由教会の代表、ヒンズー教徒、ユダヤ教徒、クエーカー教徒らによるスピーチだった。集会を取り巻く連中の中から敵意のこもった叫びをあげる男がいた。しかし、叫んだ男はマイクにたどり着けず、中途であきらめた。最後に、西インド諸島出身のグループとシーク教徒のグループによる合唱があって、デモは解散した。(4)

これに続く十数年間、つまり、ヒックがバーミンガム大学教授として活動に参加していた期間（バーミンガム大学在職期間は1967～1982の15年間。その後、再び渡米し、カリフォルニアのクレアモント大学院大学で10年間教えた。1992年、古希を迎えて退職。再びバーミンガムに戻って、現在に至る）、献身的な人々の奉仕に支えられ、また公益精神に根差すチャリティ団体からの助成を受けて、AFFORは活動を続けた。しかし、その活動にはしばしば妨害が加えられた。人種差別主義者による暴力によって、身体的な危害を加えられる者もいた。

活動の指導者たち

AFFORの実際的な活動と指導はジョン・プラマーによる。妥協を許さない挑戦的な活動のゆえに、当初は地元の警察や教会、市の地域交流委員会には好意的に受け入れてはもらえなかった。しかし、教会も行政も、当時広まっていた国内の人種差別に対しては全く無力であったので、ジョン・プラマーのような人物による果敢な挑戦的活動は必要だった。

ある時期に、ある公的人物によって、AFFORは「問題を起こすことを目的とする、怒れる男子の若者集団」として潰されかけた。全員が男子ではなく、男子と同じぐらい女子もいたし、ヒックを含めて中年者もいた。しかし「怒れる者の集団」であったことは事実である。それは人種差別に対する怒りであった。

ヒックはAFFORの運営委員長を務めた。委員にはキリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリム、シーク教徒、ヒンズー教徒、マルクス主義者、ヒューマニストが含まれていた。

委員会が最初に取り上げた問題は、ムスリムが直面している問題、すなわち、民家を祈りの家とし、ムスリムの子どもたちにクルアーンを教える場とすることだった。移住してきたムスリムたちは、企画の認可申請という手続きを全く知らなかったので、行政とは揉め事が絶えなかった。行政側はいくつかの家屋を閉鎖しようとした。その経緯を、ヒックは1974年のAFFORニューズレターにこう報告している。

> ムスリム社会の指導者たちには、市の担当官や議員たちと話し合う機会を幾度も設けた。都市の企画専門家とも話し合わせた。法律相談の場も設けた。…あるとき、私はイスラームの導師と家々を訪ね歩き、「隣家がイスラームの礼拝所として使われても反対しない」という文書への署名集めをした。ムスリムとキリスト教徒の別の混成チームは、その通りのさらに奥まで署名集めに出かけていった。私たちは有色人種や他宗教への偏見を持った人々と出会うのではないかと心配していたが、実際にはそのようなことはなかった。二つの異なる通りで、二つの異なる祈りの家に関して、ほぼ100

人近くのほとんど全ての住民が率直に人間的な対応をしてくれた。そして、ムスリムたちがここで礼拝することには何の問題もないと言ってくれた。[5]

AFFORはシーク教徒のグループにも同様の援助をした。破棄同然の教会の建物を買おうとしたが、買手がシーク教徒であることを知った教会側は、契約を破棄しようとした。そこでAFFORは介入し、この契約を実行させた。シーク教寺院は設立され、式典が立派に執り行われた。市長も出席した。功労者にはシーク教の剣が贈られた。ヒックにも贈られた。その剣は、ヒックの書斎の入り口の上に、今も掲げられている。

活動支援

AFFORの活動が広く知られるようになると、多くの支援が受けられるようになった。「カドベリー基金」が中心となって、常時、AFFORの財源を支えたが、他にも世界教会協議会、英国教会協議会、教皇諮問委員会、ウェイツ財団、ジョセフ・ラウントリー財団、グルベンキアン財団、ヒルデン慈善基金、等々が支援した。学生ボランティアの参加もあった。

学生たちの手を借りて、AFFORはコミュニティ新聞の編集にあたった。調査分野では、別の人々がまとめた報告書を発行した。「全貌を読み解く―新聞の人種報道のすべて」、「氷山の一角―イギリス社会における組織化された人種差別主義の役割」、「国民戦線に反対して何をなすべきか」、「人種差別運動―西ミッドランド1974年」、「国民戦線と国民党におけるネオ・ナチズム」、「今日の英国におけるキリスト教と人種問題」、等々である。

カドベリー基金の支援で、「アジア・リソース・センター」を立ち上げた。これは大成功をおさめて、今も続いている。現在はバーミンガムの市議会が支援している。訓練を受けたスタッフが、ウルドゥー語、パンジャブ語、ヒンディ語で、種々の相談に乗っている。

ウェイツ財団の支援を受けて、「ウェイツ図書館」を作った。この図書館は民族・人種・宗教問題の情報源として、宗教を教える教師たちの利用に供されている。また、通訳や翻訳の機関を作り、有資格のスタッフをそこに置いて、

社会事業、法律、病院、入国請求などに関するサービスにあたらせた。

教育機関における多宗教教育の実態についても調査した。調査はデーヴィド・ジェニングスとケニス・クラックネルによって行われ、英国国教会協議会の他信仰専門委員会の支援を受けた。調査の結果、実際にはそれまで多宗教教育は全くなされていないことが判明した。その後、状況は徐々に改善されていったが、ヒックの意見では、この状況に見合った神学の基礎づけは欠如したままであった。「多-信仰」（multi-faith）を容認する理論の基礎づけが焦眉の課題とされた。

啓発活動

AFFORは異文化・異宗教間の相互理解を深めるために、学校や教会に派遣する講師組織を作った。公共のイベントを支援し、「多-信仰」のグリーティング・カードを印刷し、販売した。ヒンズー教やシーク教、その他の信仰の起源や歴史を解説したパンフレットを作成した。ラジオ・バーミンガムに働きかけて、キリスト教以外の信仰にも焦点を当てた特別なイベント放送を企画させた。時には、シーク教寺院やモスクからの生放送が行われるようになった。

1975年から1976年のAFFORの年次報告書には、「その他」の項目に、次のような記事が掲載されている。

> 「ウフル」(スワヒリ語で自由・独立を意味する）への支援。ロゼル社会開発センターから独立した食品協同組合の運営。バーミンガム在住の黒人に対する人種差別攻撃事件の件数増加に関する警察との協議。郵便局員の採用時における人種差別有無に関する調査の小企画。5歳児以下を扱う保育士のための保育所と保育用バスの資金集め。数々の個人的問題への照会。(6)

つまり、公的機関に助けを求めても十分な対応をしてもらえず、住民は失望し、怒りさえ感じていたのである。この実態に即して、AFFORは、多くのアジア人や黒人たちが受けられないままになっている社会サービスの改善を目指したのであった。

人種問題

ヒックの指導の下で、AFFORは人種差別主義者の活動を監視する雑誌『サーチライト』を発行した。これは労働組合出身で、バーミンガム労働協議会の議長を務めたことのあるモーリス・ラドマーを支持してできた雑誌であった。モーリスは勇敢な男で、人種差別主義者から恐れられていた。モーリスの住所や電話番号は極秘にされたが、暴力的な人種差別主義者たちはモーリスの口を封じようとし、あるときはロンドンのデモ中、チンピラグループにモーリスを襲わせ、負傷させた。モーリスが亡くなってから数年経つが、英国における人種差別反対の戦いでは、「モーリスは重要な人物として、いつまでもその名は忘れられることはないだろう」と、ヒックは言う。(7)

人種差別は社会全体に広がっていたが、警察内部にも凝縮した形で現れていた。地元警察との間で悶着があったときには、AFFORは黒人の若者たちと一緒に行動した。警察官のすべてが人種的偏見を持っていたわけではなかったが、無視できないほど多くの警官が偏見を持っていた。その一例は、デイブ・ブチェア事件である。

デイブはカドベリー基金の援助を受けながら、真面目に働く若手労働者だった。身長が180センチを優に超える大男だったので、警察が危険人物としてマークしそうな黒人青年だった。しかし、実際は優しい巨人だった。警察はデイブをとらえようとして、ある日、正当な理由もなくデイブを呼び止めた。身体検査をし、彼の車を調べ、道具箱の中からこん棒として使えそうなものを見つけた。警察は、危険物所持の疑いでデイブを逮捕し、裁判にかけた。検察側には老練な法廷弁護士がついたが、デイブについたのは何とも頼りない法廷弁護士だった。しかしデイブは自分の力で裁判に勝利した。証言台に立ったデイブは、こん棒のようなものとされた道具の使い方を説明し、それはいつも調子の良くない車のエンジンを叩くためのものだと語った。一人の陪審員の表情からは、彼の車も同じような問題を抱えていることが明らかだった。さらにカドベリー基金のアンソニー・ウィルソンが提出した人物証明書も功を奏した。陪審員は合意に至らず、デイブは無罪。警察は控訴しなかった。

警察内にはびこるカルチャー

警察は独自の労働組合を持つ巨大組織であるが、そこに潜在するカルチャーの一部に、人種差別があった。ほぼ30年も経った今でも、それは変わっていない。1999年のマクファーソン・レポートによって、そのことは明々白々である。この報告書はステファン・ローレンス殺人事件に対する警察の対応に関するもので、そこにはメトロポリタン警察が組織的な人種差別団体であることが明示されている。

1973年バーミンガムで、警察権と地域交流に関するティーチインが開かれた。ヒックはコーディネーターの役を務めた。社会事業部の地域係官、黒人の地元労働者、上級保釈係官、人種問題の専門家、警察署長代理、主任警部らがそれぞれ短い講演をした。そのとき、警察署長代理は黒人聴衆からやじり倒された。警察は、地域交流の面では問題があることを、間違いなく認識したに違いない。

同じ年（1973年）、AFFORの活動家、ジョン・プラマーは、英国主義示威運動に対抗するデモ中に逮捕された。彼はその示威運動の行進に並んで歩き、人種差別反対のパンフレットを配っていた。そのとき、数名が彼に飛びかかって殴り、全員がその場で逮捕された。ジョンは治安妨害の罪で起訴された。その後に行われた公開法廷について、ヒックはこう書いている。

> 警察が提出した証拠とジョンの証拠とは真っ向から相容れないものだった。ジョンの証言は明確で、すばらしいものだった。３人の裁判官は彼を無罪とする判決を下した。ウォルバーハンプトンの治安判事に関しては安心だが、警察の偽証には警戒を要する。(8)

ヒックの書いたパンフレット

1976年、ヒックは「国民戦線と国民党のネオ・ナチズム―キリスト教徒への警告」というパンフレットを書いた。そのパンフレットの中で、英国のネオ・ナチ指導者たちによる暴力的犯罪の前科を暴いた。彼らは文字通りのネオ・ナチで、1950年代の英国国民社会主義運動のメンバーであり、ヒトラーの誕生日

を祝い、ナチ党の制服を着て、ナチ党の敬礼をしている写真も掲載した。彼らは「スピアヘッド」（急先鋒）という名の準軍事組織を作り、こん棒で武装していた。「国民戦線」の議長は４回の有罪判決を受けており、そのうちの１回は火器と弾薬の違法所持で６ヶ月の禁固刑を言い渡されていた。「国民戦線」の活動指揮官は２ヶ月の禁固刑、「国民党」の活動家は３ヶ月の禁固刑を言い渡されていた。彼らのプロパガンダはユダヤ人と黒人移民への憎悪に満ちていた。ユダヤ人や黒人たちを、この国の貧困と失業の元凶と決めつけ、黒人への攻撃、「パキ・バッシング」、ユダヤ教の会堂やイスラームのモスクへの襲撃を煽動し、偏見と恐怖をあおっていた。さらに、失業と経済不況の最中（さなか）、彼らは労働者階級の有権者を人種差別主義者に仕立て上げようともしていた。そのような事実から、教会は、これまでのように、ただ人種差別主義反対の一般的声明を出すだけでなく、特殊な運動に対しては断固拒否する姿勢が肝心だと悟り始めていた。

ヒックは国教会主教、カトリック教会大司教、自由教会協議会の議長らにパンフレットを送り、各教会に推薦する共同の序文に署名してくれるよう頼んだ。しかし、教会指導者たちの腰は重かった。彼らにとっての問題は、教会内にも人種差別主義者がいて、指導層が公式に人種差別反対の立場を表明すれば、教会内に亀裂が生じるかもしれないと懸念したからだった。

パンフレットの強力な支持者は、カドベリー基金のアンソニー・ウィルソンだった。彼は、教会指導者たちと無駄な時間を割かずに、自分たちだけで出版に踏み切ればよいとアドバイスした。これはヒックたち、委員の一致した考えでもあった。

「ネオ・ナチズム」のパンフレット発行は、戦略的に、タイミングがよかった。聖職者や一般信徒の多くが、人種差別の問題に何らかの指導力を待ち望んでいた時期だったからである。パンフレットは12,000部も売れた。そして、このパンフレットを基に、多くの説教が行われた。

さらに翌年（1977年）、ヒックは「今日の英国におけるキリスト教と人種問題」というパンフレットを書いた。新聞の幾つかに取り上げられると、人種差別主義者からの猛反発があり、抗議の手紙が次々とヒック宛に送られてきた。ヒックは冷静に受け止め、無視するよりも返事を書いた方がよいと考えて、次のよ

うな文面を発送した。

> お便り、有難うございます。あなたは、きっと、次の点には同意されると思います。あなたが歓迎するにしろ、しないにしろ、この国の黒人市民は、大部分がこの国からは離れられません。彼らの40パーセント以上がこの国で生まれ、他に帰るべき母国はないからです。ですから、彼らに対するあなたの憎悪と敵意が、新たな多元主義的英国社会の明るい未来を築くことに貢献するか、あるいはその明るい未来を阻むものになるのかということを、私と共に考えていただきたいのです。(9)

人種差別に反対する市民の活動

ヒックはバーミンガム大聖堂の主教の求めに応じて、教会指導の「ニュー・イニシアティブ」計画に参加し、二つのリーフレットを書いた。一つは人種差別、もう一つは民族少数派の宗教共同体について、であった。こうした活動が功を奏して、人種偏見と差別に対する教会内の態度は徐々に是正されていった。しかし、ヒックのクールな観察によれば、国民全体としては、人種差別に対する態度は、依然として変わってはいない。「英国国民党」という立派な偽装名の下で、またネオ・ナチの「国民戦線」はコンバット18という暴力的なならず者グループと組んで、相も変わらず人種差別運動を続けているからである。「英国国民党」は貧困、失業、施設の不備などという恵まれない地域の現実的な問題にとびついて、これらに対する人々の不満と怒りを、白人の生活者よりも一層困難な生活を強いられているアジア人やアフリカ系カリブ人へ差し向けようとしている。これに対しAFFORの雑誌『サーチライト』は、人種差別主義者の活動を監視し続けたし、また労働組合、政党、教会などの幅広い人々の連携からなる反ナチス連盟は、人種差別主義者への組織的反対勢力となって活動を続けている。

さらに、教育心理学者のピートは、2001年の地方議会選挙で「英国国民党」が大量の票を獲得した地域において、人種差別に反対する市民の活動に参加し、平和的な多人種・多宗教の社会づくりに努めている人々の活動を支援している。

これは、一世代前に、ヒックたちがAFFORで行っていた活動に相通じる。このピートの、キリスト教徒というよりマルクス主義者としての献身ぶりは、「自ら告白する信仰へと向かう教会人の献身を恥じ入らせるほどである」と、ヒックは評している。[10]

AFFORの個性派たち

AFFORの活動家は、男女ともに、非常に個性的であった。ジョン・プラマーは大学で法律の学位をとるために離れ、その後、ロンドンの移民福祉共同委員会で働くことになった。その後を継いだのはウィルキンス・ジェフであった。ジェフはケンブリッジ大学の古典学でトップの成績をとったソーシャルワーカーだったが、ほぼ毎日「タイムズ」紙のクロスワードパズルを15分で解くことのできる有能な人物だった。このジェフは、ウガンダのアミン大統領の手から逃れて英国に亡命して来たウガンダのアジア人問題に取り組んだ。

ジェフの後を継いだのはクレア・ショートだった。クレアは移民問題に多くの時間を割き、ロビー活動とともに、多大の助けを必要とするケースワークに数多く取り組んだ。後に国会議員となり、国際開発大臣としてトニー・ブレア労働党政権の閣僚になった。クレアは率直で平易な物の言い方をするので、国内に人気を博した。彼女は間違いなくAFFORの役員の中で最も有名になった人物である。

デーヴィド・ジェニングスはアングリカンの牧師であるが、民族少数派のコミュニティのために積極的に活動した。彼は文字通りの「万能家」で、AFFORのプログラム全体を開発し、CARAF（人種差別とファシズムに反対するキリスト教徒の会）を指導した。アニル・ブハラは、社会サービスを受けられないでいるアジア人高齢者のために尽力した。マリリン・フィリップス=ベルは、青年の雇用機会援助をする仕事に就いた。そしてベティ・ハンクスは多人種を抱える大規模なマウントプレザント総合中等学校の校長になった。

おわりに

当初は体制側の懐疑や反対に直面していたAFFORであったが、次第に理解され、同意が得られるようになり、遂には支援を受けるまでになった。自力によって始められた活動が、1980年代には体制側から支援を受ける組織にまで変化した。もちろん、この間に、体制側も相当な変化を遂げたのは事実である。そして、遂にはAFFORそのものが存在しなくなっても大丈夫なまでに、バーミンガムの宗教的、社会的状況は変化し、好転した。

1980年代半ばに、この組織は解散したが、問題が山積していたバーミンガムの諸地域で、実に多くの公益活動を行った。ヒックはこうした実践活動を通して、「宗教多元主義」の理論を実践的に創造していったのである。

注

⑴ 本稿の骨子は、第65回日本宗教学会学術大会（2006年９月、於、東北大学）において口頭発表された。なお、ジョン・ヒックの経歴及び業績については、本論集第11号（2006年12月）掲載の私の論考「ジョン・ヒック自伝と遠藤周作」を参照されたい。

⑵ John Hick, An Autobiography, Oxford: Oneworld Publications, 2002, 2005.（『ジョン・ヒック自伝』間瀬啓允訳、トランスビュー、2006年）。

⑶ 「宗教多元主義」については、注⑴に言及された私の論考 pp. 149-150 を参照されたい。

⑷ 『自伝』p. 244.

⑸ 『自伝』pp. 249-250.

⑹ 『自伝』p. 255.

⑺ 『自伝』pp. 257-258.

⑻ 『自伝』p. 263.

⑼ 『自伝』p. 269.

⑽ 『自伝』p. 271.